

TIME SCENE

WATCH SPECIAL

機械式時計を
再定義する

パテック フィリップ
クロノメトロ・ゴンドーロ
ついに復活

ロレックス
幻の特殊時計ミルガウスの帰還

ブランパン
ファン待望の
ファイティ ファゾムス再見

ショパール
L.U.C マークⅢ
クラシックは07年時計の良心だ

ジャガー・ルクルト
これぞ正しき進化系クロノ
デュオメトル・クロノグラフ

パネライ
トゥールビヨンGMTに見る
マニファトゥーラの意地

IWC
ダ・ヴィンチ コレクション
全面リニューアル

**グラスヒュッテ・
オリジナル**
ドイツ・ザクセン流
高級時計作りへの道

**10周年を
迎えたWPHH**
新たな歴史の始まり



2007

**バーゼル&ジュネーブ
新作時計徹底分析**

本格腕時計の立脚点を再考し、
時計本来の姿が見えてきた
希望の年

VOL. 9



ヒールはベース(木くぎ)で革を積み重ねて作る。そして麻の糸に松ヤニやピッチ(タール)をこすりつけて糊い込む。このような技法はイタリアにはないものだという

ズラリと並んだ木型。顧客ひとりひとりの足形に合わせた木型の調整も、もちろんサスキアさん自身が行う

Via di S.Lucia 24r, 50123, Firenze, Italia
Tel&Fax.+39 (0) 55 29 32 91

「私の靴は、すべてオーダー。固定したスタイルはまったく持っていないので、白紙からスタイルを作ります。最初は必ずここに来る必要がありますが、2回目からは、デザインや素材、色を選んで、手紙やファクスでオーダーも可能です。」
価格はイタリアの相場からいえば決して安くはない。だが、そこにサスキアさんの靴職人としての誇りが込められている。

「おだやかな表情で語るサスキアさんだが、そこには私の靴はイタリアとは違ふ」という自己主張が感じられる。
「私の靴は、すべてオーダー。固定したスタイルはまったく持っていないので、白紙からスタイルを作ります。最初は必ずここに来る必要がありますが、2回目からは、デザインや素材、色を選んで、手紙やファクスでオーダーも可能です。」
価格はイタリアの相場からいえば決して安くはない。だが、そこにサスキアさんの靴職人としての誇りが込められている。



重過ぎず、さりりとて軽薄でもなく。

絶妙なバランス感覚が冴える、
ドイツ生まれの女性靴職人

「悪いけど外から写真を撮るのはやめてもらえないかしら？」
フィレンツェの街角で偶然、見つけた小さな靴工房。
カメラを向けた私に投げかけられた
このひと言が、靴職人サスキアさんとの出会いだった。

2

006年1月。ピッティ・イマ
ジネ・ウオモ視察のためフィレ
ンツェを訪れた私は、ホテルの

そばで小さな靴工房を発見。見れば女性が
ひとりで靴を作っている。そこで何の気な
しにカメラを向けると、気配を察した彼女
は店から出て「撮影しないで」と言う。

「じゃあ中で撮っていいですか？」。そう
言うと彼女は渋々と私を店へ招き入れた。

そこで見た靴に私は圧倒された。無論、
履き心地はわからないが、スタイルは美し
く端正で、イタリア靴にありがちな過剰さ
は皆無であり、かといって英国靴ほどクラ
シカル過ぎず、適度に抑制が利いている。

「私の師匠はベンジャミン・クレマン。ハ
ンブルクの靴職人で、ジョン・ロブで働い
たこともある人です。彼から基礎的技術を
習得し、イタリアの技術を身につけるため
にステファノ・ペーメルの工房に入りました。
でも、決してそこで修業をしたのでは
なく、あくまでもペーメルとコラボレート

Saskia

サスキア



価格は、木型が400ユーロか
ら、靴が1500ユーロから。これ
に税金をプラス。納期はお
よそ6カ月。初回は仮縫いが
必要だが、楽られない人には郵
送し、自分でフィッティング



美しい緑色のカーフを用いた
ローファー。繊細な色合いとス
マートなフォルムに魅了される
が、決して定番モデルというわ
けではなく、オーダーの際はイ
チからスタイルを作る

10年ほど前にイタリアにやって
きたヴィヴィアン・サスキアさん。
まず2年間、ステファノ・ペーメ
ルの工房で働き、その後、1〜
2年かけて準備をして独立し、
工房を構えたという



ただだから間違わないでください。そ
して6年前に独立し工房を構えました」

イタリア女性かと思っただけでドイツ人だと
聞いて驚いた。ところで彼女の師匠である
ベンジャミン・クレマン氏。彼はドイツの
出版社クレーマンが発行した「Hand made
SHOES FOR MEN」にも紹介されている。

それによればクレマン氏はまず彼の師匠か
らハンガリー流の技術を受け継ぎ、その後
はロンドンに渡ってジョン・ロブ、フォス
ター&サンなどで働いたという。したがっ
てサスキアさんにもハンガリー流の技術と
英国靴の技術のふたつが継承されており、
彼女もこれを誇りとしているようだ。

「私は流行を追いません。しかし、クラシ
ックな靴も好きではありません。このスタ
イルは、足に合って履きやすく、よいデザ
インを追求した結果です」

だが、つたない英語で引き出せた情報は
この程度。飛び込みで取材するには限界が
あるので、いずれ正式に取材をさせていた
だきたいとお願いし、工房を後にした。

そのチャンスは以外にも早く訪れ、同年
9月。私は再び彼女の工房を訪ねた。

「私の作業の正直な所は師匠から受け継い
だもので、見えない部分にも力を入れて作